アッセンブリー関東予選
乙４テーブル　総評

文責　AGU[4]　立川浩人

アッセンお疲れさまでした。春セミからかけて約３ヶ月間それぞれ努力してきて、いい結果に終わった人もそうでない人もいると思います。結果だけに一喜一憂するのではなく、次に繋げて欲しいと思います。

３年生、プレイヤーとしてお疲れさまでした。ディスで得たことを他のことにも応用していって下さい。ディスで過ごした時間はこの先の人生で価値のある時間だと思います。

２年生、これからは君たちの時代です。もうすぐ新しい後輩も入ってくると思います。果たして、今の自分がディス界を引っ張っていけるのか、後輩にきちんと指導できるのかもう一度考え直してみて下さい。

テーブルの総評として、議論の内容とアドバイスを書いていきます。

石毛（芝工３）をオピニオンプレゼンターとする一般的なプロブレムソルベンシーフォーマットで議論は始まった。

NFC において、館（青学３）が日本政府視点で死刑囚を助けることが日本国民のためになるのかと疑問視し、アーギュメントを提示した。石毛は抑止力に比べ死刑囚の被害の方が重要性が高いという持論を展開していったが、館の理解を得られずに、結局 AD>DA のアイデアを提示することで話は落ち着いた。

このアーギュメントによって、何を議論していきたかったのか理解できなかった。NFC の一般的なタスクとは、現状の被害に対して日本政府が何らかの措置を考慮する必要性があるかどうかを議論することである。そうであるならば、日本国民全体の利益と死刑囚の利益との相関関係をこの場で、議論する理由や必要性が不明である。アーギュメントにおいて論の核となる根拠を詰めるのはもちろんだが、議論する必要性や議論の進め方、効果を詰めておかないとテーブルメンバーから理解を得られることは難しいだろう。アーギュメントを出して、流されて、すぐ引っ込む、これでは出してないのも同じではないだろうか。

SOL において、今田（上智２）が死刑を廃止しても廃止後に死刑を再導入する可能性があるとして、死刑囚は被害に遭い続けるというアーギュメントを提示した。このアーギュメントを議論するため自らプロシージャーを提示したが、それに基づいて議論が進められることはなかった。プロシージャーの順序とは関係なく、石毛が死刑を廃止する

のだから死刑宣告を受ける可能性は全くないという反論をしたが、今田には理解されず議論は平行線に進んだ。その後、館がオピニオンプレゼンターの AD のタームを確認することで、今田のアイデアのタームとずれていることを提示し DA の可能性があるとして議論は流れた。

結局、今田のアイデアの本質は誰にも理解されずに議論が流れてしまった印象である。新しい政策を取った後、更なる改善を求めて新しい政策を取る可能性は全てのことで言えるだろう。その点において、死刑制度が他のトピックよりもその可能性が高いということを明確に論じるべきである。また、メインクレームに反論する形のアーギュメントでは相手の理解を得られることは決してないだろう。死刑宣告を受ける、受けないという言葉面でなく、その理由を中心として議論を展開すべきである。議論が一時平行線に進んだ要因はここにあると考える。

その後、同じく SOL で中山（成蹊２）が、死刑囚にとって死ぬことよりも自由を奪われる方がつらいかもしれないというアーギュメントを提示したが、石毛によって DA の可能性がありコンパリのエリアで話そうと流された。

DA が死刑囚に復讐心を持っている被害者家族に決まり、コンパリソンが行われた。石毛が AD（生きたい気持ちを持っている TG）を DA（命を奪いたい TG）よりも救うべきだという AD>DA のアイデアを提示した。館の質問により、その理由が日本政府のスタンに従うからだということが明らかになった。その上で、館が現状でも刑罰が存在しているため、死刑囚の命を奪いたい被害者家族の気持ちも日本政府のスタンスに従っているという反論を展開した。日本政府のスタンスに従っているかどうかではなく、なぜ従っているのかについて言及すべきだという館の発言に対し、石毛が納得し自分は理由が思いつかないということで石毛のアイデアが流れる形になった。

Q によって相手のアイデアを理解することは大切ではあるが、時には反論という形で自分のアイデアを提示することも必要であろう。ディスカッションとは意見をぶつけあうものでありアイデアの聴講会でない。ぶつかりあった時に新しい打開策など生まれるものがあると思う。ただ質問しているばかりでいると、限界があり今何を話していて、どこを明らかにすれば良いという議論の道筋が不明確になる場合もある。そのようなことを考慮してもきっぱり反論を提示すれば、今回のようにアイデアが流れることはないであろう。

次に今田が AD（死刑囚：権利の強制力がある）と DA（被害者家族：権利の強制力がない）を比べると AD>DA であるというアイデアを提示した。ここでいう強制力とは労働に関するものだけに焦点を当てられていたが、なぜ税金などが当てはまらないのか不明で、時間のため議論は終了した。

アドバイス

今回の議論を見ていて、大きく２つの印象をうけた。１つ目はunderstabdingの悪さである。ごく一般的な話をしているにもかかわらず、お互いが話を理解するのにとてつもなく時間がかかっている印象をうけた。その要因として主に２つあると考える。１つ目は話し手のエクスプラの能力である。英語力は常に改善し続ける必要はあると思うが、何よりも物事を伝える順序を考えながら話しているのか。ただ、思いついたこと考えていることをそのまま発言しているように思えた。相手が理解しやすいように考えてから順序よく自分の意見を展開して欲しい。２つ目の要因として、話し手と聞き手の相互理解が全くなっていないことである。上に述べたように、話し手は聞き手が理解しやすいように発言すべきである。かつ、聞き手側も話し手が何を意図として発言しているのか意識しながら聞いていると質問すべき点、相違点などを理解しやすくなるだろう。議論とはコミュニケーションの一部である。自分勝手な行動をとっていてもすばらしいコミュニケーションにはならないだろう。お互いの相互理解を意識することで良好なコミュニケーションをとれる関係となり、議論が深まると思う。今回の議論から感じたもう１つのことは、議論を押し進める人がいないということである。今回の議論で、論点になり得そうなポイントはいくつか生まれた。しかし、それをどのように議論を進めていくかという提案が全く出ず、結論として流れる形が多かった。どのように進めるかは論点によってケースバイケースであって提案することは難しいかもしれないと思うが、思い切ってテーブルに提示して欲しい。議論が「なーなー」に終わるよりは、不十分なプロシを提示して、テーブルメンバーでプロシを改善していって議論を進めた方がより有意義なテーブルになると思う。ぜひ挑戦していって欲しい。

最後に順位と個人総評を少し

一位　石毛（芝工３）

　オピニオンプレゼンターとしての役目をしっかり果たした。その上でテーブル全体を見て、適切なカンファメや話の取捨選択を行うことで、テーブルにおおいに貢献していた。

二位　館（AGU３）

　数多くの質問によって誰よりも議論を理解しようとする姿勢が見え、その理解をカンファメを通じてテーブルに落としテーブルの議論理解度に貢献した。また矛盾点を指摘するアーギュメントをいくつか提示し議論を深めることにも貢献できていたが、自分の意見を押し通す力強さがなく残念な印象を受けた。

三位　今田（上智２）

　アーギュメントを提示していたが、局所的な介入に終わってしまっていた。

四位　中山（成蹊２）

　アーギュメントを提示していたが、局所的な介入に終わってしまっていた。

五位　岩渕（上智２）

　DA プレゼンターの立候補のみの介入に終わってしまっていた。

六位　木原（明治３）・大菅（明治２）

　両者とも、介入できないまま議論が終わってしまっていた。

以上です。本当にお疲れさまでした！！！！